

【共同研究】

特別養護ホームにおける高齢者の心理特性の研究

橋本 泰子* 森井 利夫* 矢花芙美子* 長瀬 輝誼*

A Study on Psychological Traits of Elderly People in Nursing Care Homes

Taiko Hashimoto Toshio Morii
Fumiko Yabana Teruyoshi Nagase

In this study to investigate the psychological traits of elderly people in nursing care home. The subjects were resident of nursing care homes in Tokyo and Yokohama(males, 24 mean age 80.4 range92-65. females, 36 mean age 81.0 range94-62). A test battery (Rorschach Test : R-test and Landscape Mntage Technique : L.M.T) was done from july to august of 1999.

1 R-test(1) comparison based on sex. There was a significant difference 4 scores between males and females. It showed that females are having the relationship and sympathy with other persons than males. A few difference means not only the similarity of personality but also the androgyny on elderly males and femals.

(2)comparison base on age. There was a significant difference 5 scores between 90 and 70 generation. The accept of aging is very meaningful task which may be related with the successful life and death within 70 generation. on the other hand the generation of 60 showed negative personarity traits because of they have many complicated physical, economical and psychological problems.

2 L.M.T The pictuers of 8 subjects projected the psychological trats of each years or differenc on sex.

緒 言

日本は世界一の長寿国であり、1998年度全国人口動態調査(1999年3月現在)によると、

*はしもと たいこ 文教大学人間科学部臨床心理学科
*もりい としお 文教大学人間科学部人間科学科
*やばな ふみこ 花クリニック
*ながせ てるよし 高月病院

全国の人口は1億2586万人で、老年人口の占める割合は、16.5% (前年度(16.3%)に上昇し過去最高となった。

「簡易生命表(1998年)」によれば、平均寿命は、男性77.16歳、女子84.01歳で女性は85年以降、長寿世界一の座を守っている。

さらに、厚生省の人口問題研究所の推計に

よると65歳以上の人口増加は、2000年には、17.03%となり世界最高水準になると報告されている。

このような急激な高齢化に対し、医療、福祉面での国の対応策として、厚生省は1984年に「高齢者保健福祉推進十力年戦略(ゴールドプラン)」により、強力推進することを提示した。しかし、92年度の在宅福祉サービスのホームヘルパー、ショートステイ、デイサービス等の利用状況を調査したところ達成は、目標の約2割にすぎないことが判明した。見直しの必要から「新ゴールドプラン」の策定がされたものの追いつかずに、老人福祉の財源対策として、2000年4月より「公的介護保険制度」を導入することになった。

この制度は、40歳以上の人を対象にした制度で、毎月保険料が徴収される。介護が必要と判定されると、症状や状態に応じて必要なサービスが市町村から供給され、かかった費用の1割は、自己負担するといった制度である。

なぜこのような状況に至ったのであろうか。まず、人口の都市集中化、核家族化が進み、介護される方もまた、子ども達や嫁による介護も過酷な実態があり、受け入れの各種の施設不足も福祉サービスの欠陥になっていることなどが挙げられる。

5年前に、高齢者処遇研究会が高齢者の家庭内虐待調査結果を、報告している。内訳けとしては、食事をさせない、おむつ交換をしない等の世話の放棄・拒否が57%、殴る、閉じ込める縛る、身体虐待39%、暴言や無視の心理虐待32%、年金を渡さない、経済虐待15%以上のような介護される方の悲惨な状況が明確になった。

そして、このような状況が出現する要因として、「公的な介護サービスが整わない。この国の貧しさが虐待を引き起こしている。介護を強いられる家族も構造的な被害者であり、公的介護の充実が急務である」と強い指摘がなされた。これまで、国が福祉への取り組みが、積極的でなかったことや、一方国民の老

人福祉に対する高かまりもあり、「介護保険の制度化」が導入されることになった。

さて、この世に誕生したからには、いずれ高齢者となり、人生の終末を迎えるのであるが、誰れしも心身共に健康で、人に余り世話にならず、経済的にも豊かな老後を送りたいと願っていると考えられる。残念ながら、希望通りに運ばないのが世の常である。

ことに女子の場合には、長寿であるがために、夫と死別したり、離婚後、女手で子ども達を養育し、やっと、孫達との同居生活を楽しみにしていたが、嫁に邪魔物扱いされる等の嫁・姑の確執から、うつ病になり、孤独な独居生活に耐え切れずに施設入所になることもある。

あるいは、痴呆や慢性の身体疾患から、日常生活に支障があるため家族による介護が限界となり、やもえず入所に至る。(橋本1995)

いずれにせよ、入所者は、多かれ少なかれ複雑なリスクを背負っているようである。また、特別養護老人ホームでは、個室が少なく、雑居で、24時間体制の規則による集団生活で、物理的環境要因もストレスになることもあるだろう。加齢のみならず、心理的、社会的、物理的なさまざまなリスクが、パーソナリティに影響を及ぼしているものと推察される。(橋本1995)

そこで、特別養護老人ホームの入所者を対象に、心理検査を実施し、施設入所中の高齢者のパーソナリティ特性の検討を試みたので報告する。

1 老化の概念

まず、老化について概観しておく。

長谷川和夫(1989)は「老化とは、成熟のあとにひきつづきおこる生理現象で、固体の機能が次第に衰えてゆく状態である」と定義している。

つぎに、ストレーラー (Strehler, B, L, 1962)は、老化現象に共通する4つの原則を指摘している。

(1) 普遍性 (universality)

生あるものすべてに共通して起こり、遅速の差はあっても不可避のものとして起こる。

(2) 内在性 (intrinsicity)

老化は、誕生や成長や死と同じように個体に、内在するものによってもたらされる。

(3) 有害性 (deleteriousness)

老化現象の最も特徴的なものとして、機能の低下がある。

(4) 進行性 (progressiveness)

老化現象は突発性に起こるというよりは、通常のプロセスとして起こる。そして一度起こると、元には戻らない(不可逆性)。

さらに、ピレンとカニンガム (Birren, J. E. & Cunningham, W. 1985) によれば、老化は、3つのプロセスから成立している。

(1) 1次的老化

避けられない発達プロセスの一部として現れてくるもので、更年期、反応時間の遅延、家族や友人の喪失などが含まれる。

(2) 2次的老化

病気に起因するとみられる変化(アルツハイマー病など)

(3) 3次的変化

死の直前の急速な喪失

以上のように、老化現象は、あらかじめ遺伝的にプログラムされていて、そこに疾病や放射線、食事等の環境的要因によって老化が促進されると考えられる。その他にも、老化についてのさまざまな学説がある。

2 成人のパーソナリティ発達論

代表的なユング (Jung, C.G.) とエリクソン (Erikson, E.H.) の理論を取り挙げよう。

(1) ユングによる理論

ユングは人生をライフサイクル (life cycle) で解説し、人生の前半から後半に移行する中年危機を重要視している。すなわち、人生の前半の意義となり得た子孫の増殖と養育・蓄財・社会的業績といった自然の目的は、人生の後半の意義とはなり得ない。後半の意義は文化の達成にある。「老人は、彼らの人生は上昇も拡大もしないが、しかし、無情な

内的過程は、人生の縮少を強要することを知らるべきである。太陽は、その光を世界に惜しまずに与えた後に、自らを輝かすためにその光線を引き込めるのである。」

すなわち、老後は、自己実現 (self-realization) ・個性化 (individuation) を達成し、余世を静かに諦観する。その過程を、中天に輝いていた太陽が、夕方、暗くなりかけた山の端に沈んでいく様相に象徴化し、教示している。

さらに、ユングの死生観としては、「死は単なる移行にすぎない」、死は、つぎの新しい世界へ移行するための区限りであり、一種の儀式でもある。再生されるサイクルであることを提唱している。

(2) エリクソンの自我発達論

エリクソンは、人間のライフサイクルを、8段階に区分し、各段階における心理的社会的達成目標を提起した。

老年期の特徴として、自我の統合 (ego integrity) と絶望 (despair) を挙げている。まず、自我の統合とは、これまでの7つの段階が達成されていることである。一方、絶望とは、やり直すのには、残されている時間が短かすぎるといった感情を表現している。

このような絶望は、人間嫌い、あるいは、特定の制度や人々に対する慢性的で、侮蔑的な不満の表現の背後に隠されていることが多い。老年期の基本的徳目 (basic virtues) として、叡知 (wisdom) がある。これは死を目前にしながら人生そのものに超然と立ち向うことである。これは、心身諸機能の衰退にもかかわらず、統合された経験を推持し、伝達することを意味する。このように、老年期は人生の有終の美を飾る自己実現の最も充実した円熟期でもある。しかし、そうでない場合には、絶望に陥りいわゆる偏屈な老人になると警鐘を発している。

3 高齢者のパーソナリティ特性

ライチャード (Reichard, S. 1962) は男子 (55歳 ~ 84歳、87名) を対象に、面接調査と

心理テストを実施し、適応性の観点から、高齢者のパーソナリティ特性を5つの類型に分けている。

(1) 円熟型 (mature)

この型は、日常の生活に対して思慮的、建設的に臨む、仕事に積極的に参加し、家庭や社会の人間関係に満足し、趣味などにも喜びをみい出す。自分自身を現実的に受容でき、過去を悔いたり、現実の喪失を嘆くことなく老いることができる。

(2) 安楽椅子型 (rocking-chair)

物理的にも情緒的にも他人のサポートを待つタイプである。社会人としての責任から自由になれたことを喜び、満足している。年老いることも、安楽な満足をもたらすものと感じている。

(3) 装甲型 (armored)

不安や防衛機制が強いが、それを円滑に表現する。自分の業績に対してこだわりをもち退職して怠惰な生活に陥ることを嫌う。仕事や活動を持続させることによって、身体的衰えや無力感から自己を防衛している。

(4) 憤慨型 (angry)

この型は、自己の不満や失敗を他者のせいにし、他者に敵意を向け非難攻撃しようとする。自分の業績に対する関心は高いが、仕事に対して情緒的困難を経験し、適応性は低い。年老いることと自分とを調和させることができない。

(5) 自己嫌悪型 (self-haters)

過去を振り返り、失望と挫折感を感じる。その責任を自らに課し、自らを責め自らの不幸を嘆いている。仕事に対する適応性は、まったくくない。年老いるにつれ、不適応感と自分が無価値であるという思いが強まり、うつ病になっていく。

なお、(1)~(3)までは適応的、(4)、(5)を不適応としている。

対象と方法

対象は東京・横浜の特別養護老人ホームの入所中の、男子24名、平均年齢80.4歳(範囲

92歳~65歳)、女子36名、平均年齢81.0歳(範囲94歳~62歳)で心理検査は、ロールシャッハ・テスト(Rテストと略す)と風景構成法で、平成11年7月から個別に実施した。対象者は、老人性痴呆、糖尿病、高血圧症、脳動脈硬化症、白内障、背椎変形症、心不全、慢性関節リウマチ等のいずれかの既往歴を有していた。

結果と考察

1 Rテストによる検討

Rテストの結果を表1に示す。整理法は片口式による。

(1) 性別比較

男子は24名(平均年齢=80.4 SD=8.8)、女子は36名(平均年齢80.1 SD=8.82)で、年齢に有意差が認められなかった。

両群間で、つぎの4項目にt検定で有意差が認められた。

・H% 女子22.2%、男子15.5%

($P < .02$)で、女子の出現率が高い。人間反応は、他人への関心と感受性をあらわす。

エイムス(Ames, L.B. 1993)によれば、老年群の反応内容として、動物、解剖が多く、人間反応は5%と少数である。これは高齢者の興味が自分自身と自分の身体に集中し、人間への興味が消退するからであると指摘している。確かに入所者の日常行動でも、女子は、2~3人と気の合った人達が一緒に食卓を囲んで、食事をしたり、話し合ったり仲間になっている。男子の場合は、一人でTVを見たり、孤立していること等がその現れではないかと解釈される。

・At% 女子0.8%、男子0%で有意差($P < .01$)が認められる。解剖反応は、攻撃、不安、身体への関心と関連性を有する。女子の方が攻撃性を抑圧しているために、身体症状に出やすいことや、身体に関心が高いためである。

・D% 女子47% 男子40.7%($P < .001$)で女子の出現率が高い。普通部分反応は、常識的で、日常的な方法で物事を処理する態度を示

す。女子の方が、現実的であることが関係している。

・ M 女子1.6、男子1.2($P < .02$) 有意差が認められる。人間運動反応は、他者への共感性や人間への関心を示すと指摘されているが、男子よりH%が高かったことに関連する。

小 括

ところで、4項目にしか男女間で有意差が認められなかったが、このことは、ガットマン(Guttman, D. 1987)が、男女は年をとるにつれて、パーソナリティの性差が減少し、両性具有性へ移行すると提唱されていることに一致する。

さらに、トロルとベントソン(Troll, L.E. & Bengtson, V.1982)は、両性具有性への移行は外面的というよりは、内面的で、依存と自律についての感情を含むと述べている。

これは、高齢者の健康の劣化と関係し、妻が健康であれば、夫達はより依存的な役割を受容するようになる。

したがって、入所者は、多かれ少なかれ、さまざまな疾病を伴ない、管理下で生活していることから、依存的にならざるを得ない。

とくに男性の場合には、女性的特性よりも男性的特性が、社会的に高く評価されているために、攻撃性が強かったものの、環境や身体状況によって弱体化せざるを得ない。

一方、女子の場合には、女性的特質は、社会的に望ましくないものと評価されているため、女性が年をとったとき、女性性が減少し男性性が増大するならば、自己受容は増大することになる。(Turner, B.F. 1979)。

加齢に伴ない、男女の特性が中和化されてくるために、性差が減少すると考えられる。ところが、自己イメージ図版を選択してない男子が6名、10%に対し、女子は21名、35%を占めていることから、自分らしさを女子は主張できにくいと推察される。しかし、この性差も、社会の価値観の変容により、変動することから、加齢とは関係なくいざれば減少するであろう。

(2) 年代別比較

各年代別に比較し、t検定で有意差の認められた項目を取り上げ、検討を試みる。

90代と80代

A%、F%、S%の3項目である。(表2)

・ A% 80代66.9%、90代54.4%($P < .001$)動物反応は、常同性、想像力の欠如の指標で、小さく弱い動物であれば、無気力、気持の張りのなさ、大きい動物の場合には、攻撃性と解釈がされる。90代の動物反応としては、昆虫や鳥が多いことから、生命エネルギーの低下が窺われる。

80代の場合は、動物の繰り返しが多いことから、思考の硬さが関連しているようである。

・ F%、80代62.8%、90代44.6%($P < .01$)。形態反応は、普遍的な社会化された面をあらわし、現実を正しく認知する能力に関係する。成人平均は40~60%とされている。両群ともほぼ平均範囲内であるが、90代は、外界への関心が稀薄になってきて、客観的な態度が取りにくいようである。

・ S%、80代1.5%、90代0%($P < .01$)。空白反応は、外向型の時には、自己主張、頑固さ、拒絶的な生活態度としてあらわれ、内向型の場合には、不適応感、自己批判的な生活態度として表われる。そこで向性と関係する $\frac{+}{R} \frac{+}{+}$ の出現率をみると、80代、36.5%、90代、34.6%で有意差は認められないが、80代の方がやや高いことから、外向型の特性が考えられる。

90代と70代

S%、Fc+c+C'、FC、A%、F%の5項目で他の年代の組合せよりも多い。(表3)

・ S% 70代1.4%、90代0%($P < .01$)。空白反応は、先にも指摘した通り、自主性、決断力といった自我の強さをあらわす。70代はまだ、個としてのプライドを保持していると解釈される。

・ Fc+c+C' 70代0.5、90代0.01($P < .01$)。材質反応と無彩色反応、これは、愛情欲求や感受性、そして、抑うつ気分、無気力と反対に、自己主張の行動をとるといった指標であ

る。70代の方が、情緒的反応がまだ枯渇せずに出せることを示している。

・FC 70代0.3、90代0.1($P < .02$)。70代は、先にも指摘した通り、情緒刺激に対し反応を示し、かつ、対人関係も適応的である。

・A% 70代64.6%、90代54.4%($P < .02$)。動物反応は、常同性、創造性の欠如を示すが、90代は80代と比較したときも、下回っていた。

90代の動物反応の内容から生命エネルギーの低下と解釈した方がよからう。

F% 70代58.4%、90代44.6%($P < .05$)。形態反応は、社会性と関連していることから、90代の場合は、80代よりも下回っていたことから、日常生活で形式を無視したり、対人関係も困難になっていると推察される。

ニューグーテンら(1964)は、40歳~80歳の成人を対象に主題統覚テストを実施し、高齢になるほど世界に対する情緒的な結びつきが少ないことを報告している。

したがって、70代は90代よりもまだ、生命エネルギーを有し、外界からの情緒刺激に反応が可能であり、問題解決も処理でき、対人関係も適応的であると解釈される。

90代と60代

D%、F+%、A%の3項目と少ない。(表4)

・D% 60代54.1%、90代44.6%($P < .05$)。普通部分反応は、特別の努力や総合力を必要とせず、形態水準が低い場合には、小心、偽善的であると指摘されている。60代は、90代より実際の、具体的な思考タイプと考えられる。

・F+% 60代35.8%、90代25.6%($P < .05$)。形態水準は、注意集中力、知覚と連合過程を調和させ、批判的解釈をなしうる能力を示す。これは、幼児期から年齢とともにF+%も増加するが、老人になると減少すると提唱されている。90代が低いのは発達の視点から、妥当性を有すると考えられる。

・A% 60代67.9%、90代54.4%($P < .05$)。動物反応が60代に多いということは、知的活動が不活発で、自発性や外界への関心が低下し、

抑うつ、不安を伴うものと解釈される。

ところで、60代での入所理由として、身体的、家庭的、経済的な問題が重複していることから推察すると、A%が高いことが納得できる。

さらに、両群間で有意差が少ないということは、それだけ心的活動に差がないためであろう。

80代と70代

W% Fc+c+C'の2項目と少ない。(表5)

・W% 70代54.4%、80代46.4%($P < .02$)。全体反応は、体系化、洞察力、計画性、生産性などに関係している。これまで検討したように、70代の場合は、体制化する能力が高いと考えられる。

・Fc+c+C' 70代0.53、80代0.23($P < .05$)。

この指標に関して、70代は、90代よりも出現率が高かったことから、情緒刺激に反応が容易になされる。すなわち、外界への感受性が保持されていることを意味する。

80代と60代

D%にのみ有意差が認められた。(表6)

・D% 60代54.1%、80代45.6%($P < .02$)。普通部分反応に関しては、60代が、90代、80代よりも高いことから、物事の対処の仕方は、いろいろ検討せずに、安易な方法で済ます。

70代と60代

D%、F+%の2項目である。(表7)

・D% 60代54.1%、70代36%($P < .001$)。

・F+% 60代35.8%、70代24.8%($P < .02$)。

60代が、70代よりもこの2指標に関しては出現率が高い。とくにF+%については、エイムスが老人になると減少すると提唱しているように、加齢との関連性から、70代の出現率の低下は、自然のことであろう。

小括

ところで、年代別に項目の比較を試みた結果、90代と70代に他の年代の組み合わせよりも有意差が多かった。さらに、反応に質的相異が認められた。90代の場合は、加齢による生命エネルギーの低下、自然の摂理現象と捉え

られる。

すなわち、70代が老いへのターニングポイントで、この分岐点で、しっかりと老いを自覚・受容することが、つぎの死への心の準備に連携していくことであろう。安寧な死を望むのであれば、70代の心身ともにまだ充実している時に、人生の終末の生活設計を立てて置くことが重要な仕事であり、幸福に老いる (successful aging) ことになるかと考察される。

一人一人の生き方を尊重するのであれば、在宅にしろ、施設にしろ、老人が、ゆったりと暮らせる、物理的環境や地域の支援のネットワーク作り、心理的ケア、医療、経済面等の整備が必要になってくると思われる。

しかし、少子化により、国の財源不足が明らかで、とても国や子や嫁、孫達に頼れない。結局、個人が取り組まなければならない大きな課題として、一人一人に戻ってくる、いわゆるブーメラン現象が現況である。

2 風景構成法による検討

(1) Rテストの性別年代別比較で、加齢の特徴が認められた。それが描画でどのように投射されているのか検討を試みる。

・90代 男子 92歳 (描画1)

高い山容は、紫色に霞み、川や道は細い棒となり中断し、右にも左にも進めない。田や石も浮上し、木もセピア色に塗られ、枯れて、家の土台も破線で不安定である。人物は顔だけで、身体像は欠如しているがしっかり口を結び遠方を見ている。動物や花は書けない。全体に白抜きで、生命エネルギーの低下が認められる。

・90代 女子 93歳 (描画2)

「筆を握ったことがないので書けない」と言う。「山はだめだ」と四本の線で消す。花、人物、猫を焦げ茶色で塗りつぶす。ついで、丁寧に書いた家を茶色で彩色し、川も道も同色にする。2本の木だけは濃いグリーンにする。

まず、山は、目的や課題であることから、もう人生の希望もない。茶色は、うつ気分や

身体疾患と関連を有することから、体調もよくない。女子の方が身体への関心が強いといった、Rテストの結果と一致する。

しかし、緑色の木からは、生命エネルギーは、残っている。よく見ると人間が4人いる。対人関係は稀薄になっているが、まだ保持されている。用紙の上が白抜きであることから、生への願望、目的は消失している。

Rテストの性別比較で認められた所見との関連性が窺われる。

・80代 男子 85歳 (描画3)

アイテムの書き方に歪みがあり、彩色の仕方も雑になっている。岩山は、2ヶ所、樺色で彩色し、力強さに欠ける。田、川、道、石も浮上し、現実感がない。木は細い線で、側の牛も顔と耳は大きい、体は2本線で、委縮している。2階家は崩れそうである。人物は、丸い胴体だけ赤で強調されている。

一応、男性性を誇示しているようであるが、それも、力強さを失い、形骸化した根痕が残存するだけである。

これは、Rテストで、80代に外向性が認められたが、そのことに一致すると考えられるが、それもかなり、不確実になっていると解釈される。

・80代 女子 82歳 (描画4)

ダイナミックな鳥瞰図的に、家からの裏庭の景色を書いている。表通りでなく、引退していることを表現している。生命エネルギーを表わす巾広い川の両端の水が消えている。池も干上り、赤い鯉が水を求めている。花畑には小さな赤い花が咲き、右の道路沿いに小さな家が建っているが、人物がいない。川と池の間に、地蔵さんが祭られている。死生観が確立していると考えられる。

・70代 男子 74歳 (描画5)

全体に構成され、整っている。高い山の途中に水車のある農家、そこに通じる道と水車そして川、横向きの人物に彩色されてない。自分が働いてないといった自己不全感が窺われる。しかし、山、木、草、田は緑色で、倒れそうな古木の赤い梅から、情緒的な反応

は可能である。茶色が使用されていることから、体調は、余りよくないようである。

・70代 女子 70歳(描画6)

曲線でアイテムが書かれ、彩色されている。赤い太陽が加筆され、明るくメルヘン的な印象がする。人物も幼児で、「服に合し、ベレー帽もピンクにしよう」と楽しみながら書いていた。川、道の方向や、ウサギから、性格は内向型のようなのである。

・60代 男子 68歳(描画7)

用紙の右に寄り、アイテムも小さく、彩色も雑で、構成放棄型である。木の幹、道、山が赤色で彩色され、怒りが感じられる。道、川、人、家いずれも斜で、世の中に背を向けているようである。人物は、ロボットのように硬い。現実に関心を持ちながら、自分の思い通りにならず、自暴自棄の印象を受ける。Rテストで、60代の入所には、さまざまな問題が、複雑に錯綜していると指摘したことに一致していると解釈される。

・60代 女子 68歳(描画8)

用紙全体を用い構成がなされている。高い山の下に、ウサギと元気そうな口バがいる。しかし、川の色が水色でなく、薄いピンク色で、右下の3本のアヤメの花が強調されている。人物の頭、右手が彩色されてない。じつは、本人が脳血栓で意識不明になった時に、山奥の三途の河原に、鮮かなアヤメの花が咲いていた。途中で、主治医と坊さんに、「病院とお寺に行ってもしょうがないよ」と言われた。足が痛いので、ワラジをはき代えようとしていたら、正気に戻った。とドラマチックなエピソードを話しながら書いてくれた。川の色がピンクなのは、三途の川の印象が強かったからであろう。人物の頭、片腕が白抜きなのは、一時的に、死の体験をしたことや、入所生活をしているために、社会との疎遠感を投射していると考えられる。

さらに、家と人物を継ぐ道が不確かであることから、家族関係も稀薄になっている。まだ田が緑色で、教養を積みたい願望が強い。それを十分達成しないと悔が残る、老いを自

覚、受容することが困難になるであろう。

小 括

各年代別に男女8名の描画を検討したところ、Rテストで認められた年代別あるいは性別特徴や心理的、性格特性等が把握された。

要 約

東京・横浜の特別養護老人ホームに入所中の男子24名、女子36名、計60名を対象に、平成11年7月からRテストと風景構成法を実施して、以下の結果が得られた。

1 Rテスト

(1) 性別比較

女子が4項目(H%、At%、D%、M)に男子よりも高い出現率を示した。女子は、対人関係に共感性を示し、身体への関心も強い、問題解決も現実的である。

なお、男女間で有意差が少ないことは、パーソナリティの性差が減少していることを意味する。これは、両性具有性へ移行すると指摘されていることに一致する。

(2) 年代別比較

90代と80代、3項目(A%、F%、S%)に有意差が認められた。90代は、生命エネルギーの低下、外界への関心の稀薄さ、80代は、外向傾向を示す。

90代と70代、5項目(S%、Fc+c+C'、FC、A%、F%)と一番多く有意差が認められた。90代より70代は、生命エネルギー有し、外界刺激へ情緒反応もなされ、対人関係も適応的であり問題解決も可能である。

90代と60代、3項目(D%、F+%、A%)と少ない。90代は、加齢に伴い減少すると指摘されているF+%が60代より下回っていた。60代は、自発性、外界への関心の低下が認められる。これは、60代で入所するということは、複雑な問題を有しているためと考えると、当然の結果と解釈される。

80代と70代、2項目(W%、Fc+c+C')と少ない。70代の方が、統合力、感受性を有する。

80代と60代、1項目(D%)しか有意差がない。60代は、問題解決の仕方が安易である。

70代と60代、2項目(D%、F+%)である。60代は、いずれの年代よりもD%が高いことから、現実的な問題解決をし、物事を批判的に解釈する。

以上の結果から70代の心身ともにまだ充実している時に、老いを自覚・受容し、人生の終末の生活設計を立てて置くことが、重要な仕事であり、幸福に老いることに連鎖すると考察される。

2 風景構成法による検討

各年代男女8名の描画を検討したところ、Rテストで認められた特性、生命エネルギー、情緒反応の低下、身体の不調、うつ気分、怒り、自己不全感、家族や社会との関係の稀薄さ、死生感、臨死体験等が把握された。

謝 辞

市川医院の市川康夫院長、

特別養護老人ホームサンシャインホームの笹本悦弘施設長、江川輝元、遠藤生活指導員、元藤原看護婦、みどりの森の高橋施設長、入所者、及び関係者に深謝致します。

本研究は平成11年度文教大学人間科学部大学院共同研究費の賛助による。

引用参考文献

- Ames, L.B. et al. Rorschach responses in old age, Brunner / Mazel New York 1973 黒田健次他(訳)「高齢者の心理臨床学 - ロールシャッハ・テストによる - 」ナカニシヤ出版 1993
- Birren, J.E & Cunningham, W. Research on the psychology of aging principles, concepts and theory New York: Van Nostrand Reinhold. 1985
- Erikson, E. H. et al. Vital involvement in old age. New York: Norton 1986
- 朝長正徳他(訳)「老年期」みすず書房 1990
- Guttman, D. Reclaimed Powers, New York-Basic Books. 1987
- 長谷川和夫「老化」那須宗一(監修)

- 「老年学事典」(P5 - 6) ミネルヴァ書房、1989
- 橋本泰子「老人ホームにおける不適応現象を呈した症例の心理学的研究」城西大学女子短期大学部紀要12、1(P97 - 98) 1995
- 橋本泰子「現代大学生における高齢者認識の研究」平成5年度学長所管研究報告書(P11 - 12) 1995
- 自治省「住民基本台帳 98年度調査」1999
- Jung, C.G. The stages of life. The collected works of C.G.Jung (Vol.8) New York: Pantheon. 1960
- 片口安史「新、心理診断法」金子書房 1991
- 厚生省「高齢者保健福祉推進十カ年戦略(ゴールドプラン)」1984
- 厚生省「簡易生命表」1999
- 毎日新聞「介護保険の動き」1999
- 西村純一「成人発達の心理学」酒井書店 1996
- Reichard, S. et al Aging and Personality, John wiley. 1962
- Strehler, B.L. Time cell and aging, New York: Academic Press 1962
- 高橋雅春「ロールシャッハ解釈法」牧書店 1970
- 田中荘司他「高齢者の実態調査」高齢者処遇研究会、1994
- Troll, L.E. et al Intergenerational relations throughout the life span, In, B.B. Wolman(Ed) Hand book of developmental psychology. Englewood cliffs, N.J. Prentice Hall, 1982
- Turner, B.F. Mental health and the older woman, In G.Lesnoff-Caravaglia(Ed). Hand book of applied gerontology New York: Human science press. 1987
- 山中康裕編「H.NAKAI 風景構成法」
- 中井久夫著作集別巻 岩崎学術出版社 1984

表 1 高齢者男女比較

age	R		M		F		Rej		TT		RIT		N.C		C.C		W%		D%		Dd%		S%		M		C		
	f	m	f	m	f	m	f	m	f	m	f	m	f	m	f	m	f	m	f	m	f	m	f	m	f	m	f	m	
average	80.4	81	10.3	10.9	2	1.4	294.3	253.3	15.22	11.9	11.9	11.7	19.8	12.7	39.8	46.4	40.7	47	7.8	5.1	0.8	2.2	1.2	1.76	1.09	0.7	0.7	0.7	0.7
stdev	8.6	8.32	4.2	3.3	1.62	1.3	247.51	116.06	11.22	6.375	7.06	6.55	16.94	22.89	16.69	16.69	16.69	16.69	16.69	16.69	16.69	16.69	16.69	16.69	16.69	16.69	16.69	16.69	16.69
t-test																													

表 2 90代と80代との比較

R	80代		90代		80代		90代		C.C		W%		D%		Dd%		S%		M		C		FM		FM				
	f	m	f	m	f	m	f	m	f	m	f	m	f	m	f	m	f	m	f	m	f	m	f	m	f	m			
average	4.69	11	1.27	1.53	105.14	105.14	227.63	7.32	6.786	6.2	7.69	13.4	7.9	18.59	8.15	8.15	8.15	8.15	8.15	8.15	8.15	8.15	8.15	8.15	8.15	8.15	8.15	8.15	
stdev	1.1	1.1	0.3	0.3	10.717	10.717	0.33	0.48	1.01	0.85	1.118	1.108	1.94	2.1	2.1	2.1	2.1	2.1	2.1	2.1	2.1	2.1	2.1	2.1	2.1	2.1	2.1	2.1	2.1
t-test																													

表 3 90代と70代との比較

R	90代		70代		90代		70代		C.C		W%		D%		Dd%		S%		M		C		FM		FM	
	f	m	f	m	f	m	f	m	f	m	f	m	f	m	f	m	f	m	f	m	f	m	f	m	f	m
average	4.69	2.73	1.27	1.54	105.14	107.2	7.32	11.75	6.2	7.51	8.829	17.595	18.81	17.86	17.15	12.56	6.265	5	3.59	1.94	1.06	0.92	0.76	2.083	2.083	
stdev	1.1	1.1	0.3	0.3	10.717	10.717	0.33	0.48	1.01	0.85	1.118	1.108	1.94	2.1	2.1	2.1	2.1	2.1	2.1	2.1	2.1	2.1	2.1	2.1	2.1	2.1
t-test																										

表 4 90代と60代との比較

R	90代		60代		90代		60代		C.C		W%		D%		Dd%		S%		M		C		FM		FM	
	f	m	f	m	f	m	f	m	f	m	f	m	f	m	f	m	f	m	f	m	f	m	f	m	f	m
average	4.69	2.79	1.27	2.03	105.14	171.11	7.32	11.18	6.2	7.32	8.829	17.461	18.81	19.31	17.15	16.68	6.265	7.196	0	0	1.94	1.05	0.92	0.7	2.083	
stdev	1.1	1.1	0.3	0.3	10.717	10.717	0.33	0.48	1.01	0.85	1.118	1.108	1.94	2.1	2.1	2.1	2.1	2.1	2.1	2.1	2.1	2.1	2.1	2.1	2.1	2.1
t-test																										

表5 80代と70代との比較

R	Reg		TT		RTT	NC	C.C		W%	F%	D%	Dd%	F%	R+%	M	C	FM+M
	70代	80代	70代	80代			70代	80代									
average	3	3	3	3	2	2	13.6	13.6	22.3	17.8	12.56	6.5	16.38	3.5	1.51	0.5	2.468
stdev	1.7	1.54	2.77	2.83	6.766	11.76	7.51	17.569	22.3	17.86	12.56	6.5	16.38	3.5	1.51	0.5	2.468
t-test	4	2.73	1.53	1.54	6.766	11.76	7.51	17.569	22.3	17.86	12.56	6.5	16.38	3.5	1.51	0.5	2.468
P<.05																	
Content Range																	
Determinant Range																	
FC																	
CF+C																	
FC+CF+C																	
FM																	
F%																	
D%																	
Dd%																	
R+%																	
M																	
C																	
FM+M																	

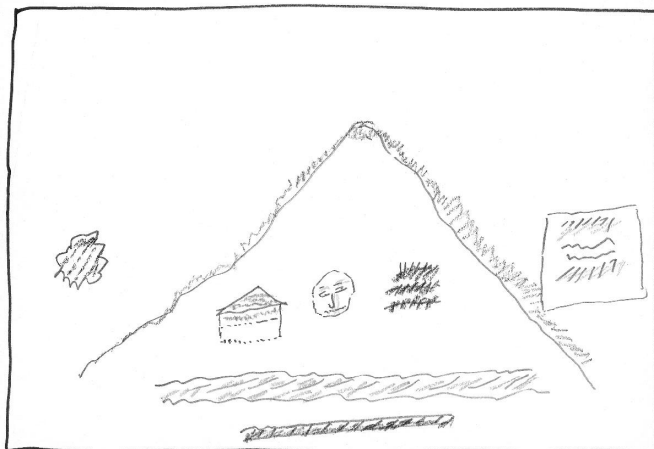
表6 80代と60代との比較

R	Reg		TT		RTT	NC	C.C		W%	F%	D%	Dd%	F%	R+%	M	C	FM+M
	70代	80代	70代	80代			70代	80代									
average	3	3	3	3	2	2	11.6	11.6	22.3	17.76	16.68	6.51	7.196	0	1.51	0.99	2.468
stdev	1.7	1.53	2.77	2.83	6.766	11.18	7.09	17.461	22.3	19.31	16.68	6.51	7.196	0	1.51	0.99	2.468
t-test	4	2.79	1.53	1.54	6.766	11.18	7.09	17.461	22.3	19.31	16.68	6.51	7.196	0	1.51	0.99	2.468
P<.02																	
Content Range																	
Determinant Range																	
FC																	
CF+C																	
FC+CF+C																	
FM																	
F%																	
D%																	
Dd%																	
R+%																	
M																	
C																	
FM+M																	

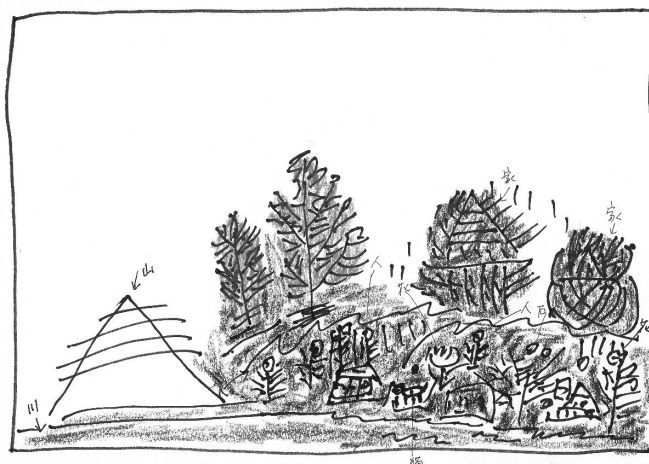
表7 70代と60代との比較

R	Reg		TT		RTT	NC	C.C		W%	F%	D%	Dd%	F%	R+%	M	C	FM+M
	70代	80代	70代	80代			70代	80代									
average	3	3	3	3	2	2	11.6	11.6	22.3	17.76	16.68	6.51	7.196	0	1.51	0.99	2.468
stdev	1.7	1.53	2.77	2.83	6.766	11.18	7.09	17.461	22.3	19.31	16.68	6.51	7.196	0	1.51	0.99	2.468
t-test	4	2.79	1.53	1.54	6.766	11.18	7.09	17.461	22.3	19.31	16.68	6.51	7.196	0	1.51	0.99	2.468
P<.02																	
Content Range																	
Determinant Range																	
FC																	
CF+C																	
FC+CF+C																	
FM																	
F%																	
D%																	
Dd%																	
R+%																	
M																	
C																	
FM+M																	

90代 男子 描画 1



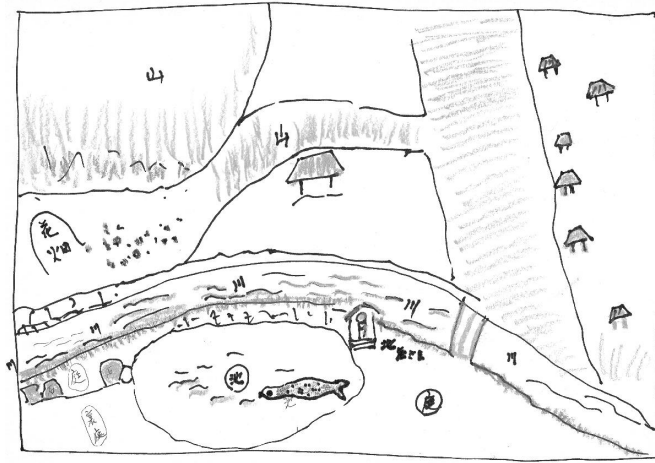
90代 女子 描画 2



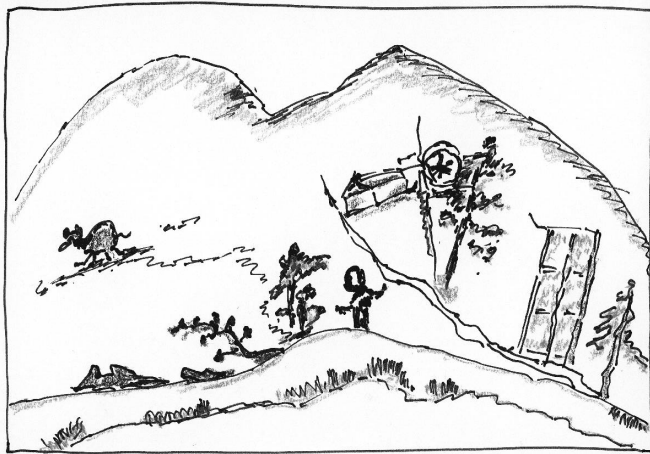
80代 男子 描画 3



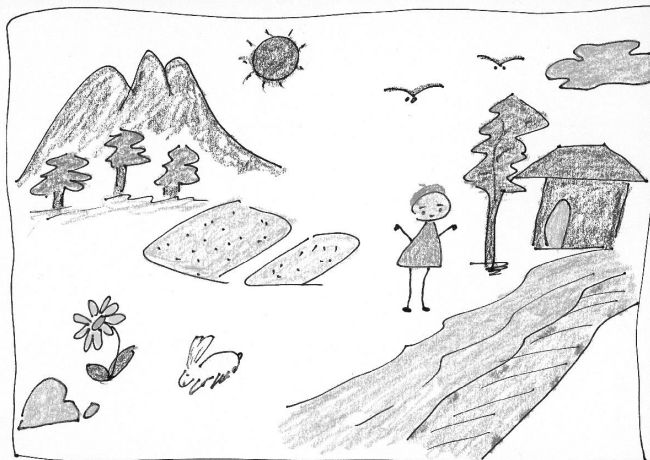
80代 女子 描画4



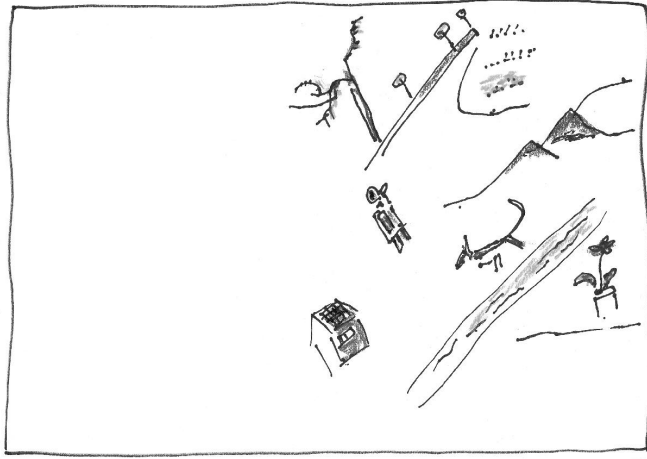
70代 男子 描画5



70代 女子 描画6



60代 男子 描画 7



60代 女子 描画 8

